

12月31日主日礼拝

「初めの愛」に戻って

黙示録 2:1-7

救い主なるイエス・キリストは十字架に死なれ、三日目に復活された後、しばらく弟子たちに現れ、天に帰ってゆかれました。天に帰られるのと引き換えに地上に二つのものを残されました。聖霊と教会です。教会とは建物ではなくキリストを信じ、主と告白する者の集まりです。では何をもって教会はキリストの教会であると言えるのでしょうか？

1) 栄光の主

黙示録は、イエス・キリストを「栄光の主」として描いています。イエスの栄光のお姿が、象徴的な言葉によって表されています。しかし、その意味を特定するのはそんなに難しくはありません。たとえば1節を見ると「7つの星」の星とは「教会の御使い」、つまり、教会の指導者のことを意味し、「金の燭台」の燭台とは「教会」を表わしています。これはすぐ前の黙示録 1:20 に出ています。

今日のエペソ教会へのメッセージでは、キリストは「右手に七つの星を握り、七つの金の燭台の間を歩く方」（1節）として描かれています。「右手」というのは「力」や「権威」を、また、「保護」を表わします。「星」は教会の指導者ですから、キリストが七つの星をその右手に持っておられるのは、キリストご自身が教会の指導者たちを保護しておられることを意味します。教会は、キリストの栄光を人々に表わすので、「燭台」と呼ばれています。キリストが「燭台の間を歩」かれるというのは、キリストが絶えず教会と共におられることを意味しています。

初代教会の指導者たちは、外からの迫害と教会内部の分派の両方から絶えず攻撃を受けていました。教会を滅ぼそうとする勢力は、当時「監督」と呼ばれた使徒たちの後継者に攻撃を加えました。指導者を倒してしまえば、教会も倒れると考えたのです。しかし、教会は、礼拝のたびごとに、栄光のキリストを見上げ、ひたすらにキリストに頼りました。キリストは教会を支え、その指導者を守ってくださいました。多くの監督が殉教を遂げましたが、教会はついに分派を退け、迫害を克服したのです。

内に外に大きな問題をかかえ、嵐にもまれてきた教会が勝利を得たのは、何によってでしょうか。それは、栄光の主を指し示すメッセージによってであり、そのメッセージによって栄光の主を仰ぎ見る礼拝によってでした。礼拝がキリストの栄光を輝かせるものであったのです。私たちのささげる礼拝もそのようでありたいと思います。その時、教会は、キリストの栄光をこの世に指し示す「金の燭台」となることができるのです。ヨハネ 1:14 に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。」とあるように、イエスの栄光をさらに知り、栄光のキリストを人々に知らせる者になりたいと思います。

2) 愛の主

黙示録に描かれているイエス・キリストの第二の姿は「愛の主」です。キリストは王の王、主の主であって、あらゆるものに、「かくあるべし」と命じることのできるお方です。たとえ、私たちが主のことばに従ったからといって、それは私たちの功績にはなりません。主のために何かができたとしても、「それは私がやりました。」と言って大きな顔ができるものでもありません。主が助けてくださらなければ私たちは何一つ成し遂げることができなかつたし、主の恵みなしには何もできないからです。そのような者であるにもかかわらず、主は、教会を愛して、私たちのしたことを褒めてくださるのです。

主は、エペソ教会に対して 2 節で「わたしは、あなたの行ない、あなたの労苦と忍耐を知っている。」と言って、「行いと労苦と忍耐」を高く評価しておられます。エペソの町は、当時のアジアの首都でした。

おそらく、エペソ教会はその地方で一番大きく、力のある教会だったでしょう。しかし、キリストは教会の大きさや強さではなく、その信仰と、希望と、愛とを見て、それを褒めてくださいました。コリント第一 13:13 に「いつまでも残るものは信仰と希望と愛、これら三つです。」とあります。エペソ教会が「いつまでも残るもの」について主から褒められているというのは、とても名誉なことでした。

しかし、こんなに立派な教会でも、主からお叱りを受けています。「あなたには責めるべきことがある。」と主は言われます。エペソ教会の、いったいどこが悪かったのでしょうか。「あなたは初めの愛から離れてしまった。」と主は言われます。エペソ教会は愛のない冷たい教会だったのでしょうか。そうではありません。よく忠実に教会のために労し、忍耐をもって信仰生活を送る信徒が多かったのです。しかし、主がエペソ教会に求められた愛は、「他の教会からくらべてよりました」であればそれでよいというものではありませんでした。主は、教会に、より深く主を愛するようになることを、その愛が成長していくことを求められたのです。エペソ教会は、人の目から見れば、何の問題もなかったかもしれません。しかし、主の目から見ると、その愛は「初めの愛」から比べてずいぶん後退してしまっていたのです。数年前まで持っていたあの純粋な愛が、何かの原因で曇ってしまったのです。エペソ教会はなお主を愛する教会でしたが、以前のようにはなくなってしまったのです。主がエペソ教会を叱責されたのはそのためでした。ただ覚えておかなければならないのは主は愛のゆえに叱責されているということです。私たちの成長を願うからこそ主は指摘されるのです。主は、神に逆らう人々をどうされるのでしょうか？より厳しく叱責されるのでしょうか？そうではありません。そのなすがままに任せておかれます。自分で蒔いた種を自分が刈り取るようにされます。主を愛する者、また、主が愛する者には、その人を正しい道に導くために懲らしめを与えます。懲らしめは主の愛のしるしなのです。

私たちはどうでしょうか。主は、私たちが互いに他と比べあって自分を評価することを望まれません。互いに比べあうことは間違っており、また、無意味なことです。それよりも、この一年で自分自身が神への愛において、どれほど成長できたかを検討すべきです。たとえ未熟であっても、成長が遅くても、最初に主を信じた時よりも、信仰や愛がいくらかでも成長していれば、主はそれを褒めてくださいます。たとえば、自分では、大丈夫と想着いても、最初に主を信じた時よりも、信仰や愛が後退していたなら、主はそれを責められます。他人のことではありません。自分自身のことです。エペソの教会は迫害にあっても揺り動かされることなく固く信仰に立って歩きました。教会は立派だったのです。ただ立派さの後に来る誘惑として自分や他人にたいする厳しい視線、評価をしてしまうということがあります。また劣等感の裏返しのような優越感や自己満足感というものがあるかもしれません。そこで主は言われます。「だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。」初めの愛に戻るということはもう一度、神が私を見ていて下さるように自分自身を見るようになるということです。神の恵みと憐れみ無くして今の自分はないのだと受け入れることです。

3)勝利の主

第三に主は「勝利の主」です。初代教会には迫害の嵐が荒れ狂っていました。教会の内部にも、「にせ使徒」や「ニコライ派」と呼ばれる間違った教えが入り込んでいました。エペソ教会は、「にせ使徒」から身を守り、「ニコライ派」と戦いました。そして、今、「初めの愛」から離れてしまった、自らの罪と戦っています。教父たちや改革者たちは地上の教会は「戦う教会」とは言いましたが、確かにその通りです。教会にはいつの時代にも「戦い」がありました。教会は迫害を乗り越え、伝道が進み、組織や礼拝の形式も整えられ、学問的にも深められていきました。戦いに勝利してきたのです。そして問題が無くな

ると思いきや、そこに教会の中で権力争いや主知主義、形式主義がはびこり、それと戦わなくてはなりません。現代は、物質主義や相対主義、また世俗主義との戦いがあるように思います。教会は、これからどんなものと戦っていくのか、具体的なことは明らかではありませんが、聖書の預言によれば、それは、真理を守る戦いになるでしょう。天国を目指し、永遠を指し示さなければならない教会が、時代の流れに流され、世と妥協し、福音をもっともらしい人間の教えに置き換えるようになるでしょう。その中で真理を堅く保とうとする教会が攻撃の対象となり、さまざまな戦いを経験するようになるということです。

今までどおり慣れ親しんできたように生活を続けたいと願っている人には、聖書の真理が示されることは、迷惑なことであり、無意識のうちに真理に抵抗してしまうことがあります。しかし、そうした思いと戦って真理に服従してこそ、私たちは、本物の神の民となり、勝利を得る者となることができます。テモテ第二 2:11-13 にこう書かれています。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。キリストを否むなら、キリストもまた、私たちを否まれる。私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」私たちの勝利は「主にあって」のことです。勝利は主から来るのです。キリストは永遠に真実なお方であるので紀元一世紀のエペソ教会に与えられた約束を自分に与えられた約束として握り締めることができます。新しい年が巡ってくるたびに、主の再臨が近いことを感じ、緊張を覚えます。主の再臨の前に苦難の日がやってくることを思うと、不安にもなります。しかし、主は、勝利の主です。主は「勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」と約束しておられます。主の勝利を確信して、新しい年に向かって進んで行こうではありませんか。